

## 15 年のあゆみを振り返り、展望する

時田 アリソン

1880 年、本学美術学部の前身である京都府画学校が設置された。1952 年、音楽学部の前身となる音楽短期大学が設置された。つづいて 2000 年、音楽学部の中にはなかった、日本の伝統音楽を研究する機関、日本伝統音楽研究センター（以下、伝音センター）が設置された。伝音センターは組織として若く、今後の発展が期待される。

伝音センターの設立理念は、もっぱら日本音楽の研究におかれていた。現在でも日本音楽専門の研究機関としては日本唯一である。その後研究活動は少しずつ多様化し、大学院教育や、市民向け活動の役割も加えられた。

伝音センターが京都で設立された意義は大きい。関西は多くの日本芸能の発祥地であり、そのほとんどすべてが全国に普及している。京都特有のものは、民俗芸能は別として柳川流三味線ぐらいかもしれない。しかし、京都は、継承者の種類と数においては、いまも抜きん出ている。当道関係の地歌・箏曲、尺八、胡弓、演劇関係の能、浄瑠璃の義太夫・常磐津・新内などと長唄、行事の一部である声明、雅楽、また琵琶、一弦琴、民俗芸能の継承者がおおくいる。

センターの設立者であり初代所長の廣瀬量平は作曲の教授であり、2000 年 10 月 22 日に日本音楽史研究者の吉川英史との対談の中で、次のように述べている。「私は作曲家ですが、先生のような方がいらっしゃったので、日本の作曲が豊かになったということもございます。伝統音楽を大事にするだけでなく、伝統音楽を土壌にしてみたら、新しい音楽がたくさんできてくるわけで、先生はお気づきにならないかもしれませんが、大変なお仕事をされてきたわけです。我々は次の世代にそれを受け継いでいかなければならないのですが、先生の歩んで来られた道はかけがえのないお手本です。」<sup>(1)</sup>つまり、伝統音楽は、日本人作曲家にとって、作曲の資源になるだけでなく、新しい日本音楽を作るベースになるべきだと、廣瀬は考えていた。廣瀬は、2001 年 3 月に行われた、最初の伝音センターシンポジウムで「なぜ今、日本伝統音楽なのか」というテーマを掲げ、「そもそも、何をもって日本伝統音楽とするのか」「その魅力は何か」「その存在意義とは」「それが継承・保存・研究される意味と課題」「教育との接点」「国際的視野から見た日本伝統音楽」「日本伝統音楽の将来」等について問うた<sup>(2)</sup>。それから 15 年がたった。

### 研究

日本音楽研究という使命が見事に果たされていることに疑いの余地はない。5 人の専任研究員の個人研究と全国から募集する共同研究に加えて、研究者の育成を兼ねた特別研究員（非常勤講師）と非常勤嘱託員による研究があり、業績は量的にも質的にも優れている。その研究テーマはほぼ日本の音楽と芸能を網羅し、雅楽から浄瑠璃・長唄まで、民俗音楽・芸能から現代作曲まで、座敷歌から劇場音楽まで、歌い物、語り物、器楽曲を対象としている。雅楽・舞楽、幸若舞、能、義太夫節などの復曲するなど、多くの試みが生まれている<sup>(3)</sup>。

ほかに、シンポジウムを開き、集中的に国内外の研究者と一緒にひとつのテーマを追求している。

こうした研究の業績は出版物、CD、DVD、紀要そして外部の出版物などとして公開されている<sup>(4)</sup>。

また、伝音センターは、図書室を中心にして、幅広く実物資料とデジタル資料を収集しており、アーカイブの役割を果たしてきた<sup>(5)</sup>。特に委託研究でレコードなどのデジタル化を推進し、音楽資料のデジタル化では先進的

な役割を果たした。この資料はだれでもインターネットをつうじて聴くことができる<sup>(6)</sup>。

## 教育

設立当初から実技教育はせず、学部レベルでは邦楽専攻はないが、音楽学部・研究科の学生を中心に授業を提供している。2012年の大学法人化に際し、大学院（音楽学修士課程）に日本音楽研究専攻ができ、伝音センターの研究者がその授業を受け持ち、論文指導を行っている<sup>(7)</sup>。日本音楽研究専攻の授業には実技の部分を含むことが多く、学生が町の師匠を選んで通って学ぶインターン制度がある。

## 市民への還元

市民向けの活動を重視しており、研究プロジェクトの成果を、年に3～4回の公開講座や、年に6回の連続講座、年に8回のでんおんセミナーとして、だれでも参加できる催しの形で公開している<sup>(8)</sup>。また、伝音センター図書室を、2009年に開設し、学芸員と司書が、一般の問い合わせに対する相談と情報提供をおこなっている。

## 国際的活動と海外への発信

設立当初より、外国からの専任および客員研究員の招聘、また海外からの研究者による講演などを行い、国際的視野での日本音楽研究をすすめてきている。外国人専任研究員にはSteven Nelson（2000-2004年）が就任し、2014年にはAlison Tokitaが所長に就任した。数週間から一年半まで滞在する客員研究員は多い<sup>(9)</sup>。モスクワ音楽院その他との国際交流は活発であり、海外の日本音楽研究の支援もひろくおこなっている。2015年には、所長サロン「海外で日本音楽をしている人々」シリーズにおいて、外国人研究者をまねいて、話を聞いた。

## これからを展望する — 5年先そして大学移転も念頭において

日本音楽の将来のために、伝音センターにできることは、「純粋な研究」を軸にすることを守りながらおこなう、「応用研究」であろう。2008年に出版された『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』（久保田敏子・藤田隆則編）ではすでに、こうした「応用」の可能性を真剣に検討しており、そこには「応用」領域にふみこむことへの、強い決意も感じられる。

日本音楽の将来のための研究をするには、日本音楽一般が抱えている問題を視野に入れなければならない。

まずは、ふたつの領域で、聴衆を養成していく必要がある。ひとつは、日本音楽の演奏会を楽しく、面白く鑑賞できる一般の聴衆、そして、もうひとつは、広く人文学、社会科学などの研究者という聴衆である。研究者自身が日本音楽をきちんと理解し、認識し、評価できるようにならなくてはならない。そうした基盤の上で、日本音楽の将来を考え直す研究が必要になるだろう。それは、同時代の海外でも価値のある研究であるということにもなる。

つぎに、国際化へむけて、特に、日本音楽との共通点が多い東アジアの音楽研究者とのネットワークを強める必要がある。東アジアは歴史的ルーツを共有するだけでなく、近代においても西洋音楽との出会いや衝突の経緯も酷似している。現在、勢いのある西洋音楽と固有の音楽文化（伝統音楽）とのバランスは、大きく、微妙な問題だが、それに対する姿勢は国によって様々である。日本はそのやり方を参考にして学ぶことが多いと思われる。明治時代から日本は法律などによる文化遺産の保護政策をとり、文化財研究などに力を入れてきており、戦後も保存会の活動も盛んであるが、それらは隣国にとってのモデルになった。しかし、教育面では伝統音楽をカリキュラムから除外してきており、近年それを戻そうとしているが、事実として、邦楽の専門家の弟子の数が減っており、観客層もうすくなってきた。

さらに、伝統音楽をベースに新しい音楽を創り出す音楽家との繋がりを強めなくてはならない。廣瀬量平のピ

ジョンがそうだったように。作曲の学生だけではなく、演奏の学生にも、音楽学の学生にも、日本音楽の通り一遍の知識ではなく、その真実と魅力を伝え、支援する方向へ研究を大胆かつ慎重に進めなければならない。

注

- 1 日本伝統音楽研究センター『所報』第1号 2001年3月、5ページ。
- 2 「今、なぜ日本音楽か」『日本伝統音楽研究』第1号 2004年3月、233-248ページ。
- 3 研究活動のページ <http://w3.kcua.ac.jp/jtm/activities/index.html>
- 4 出版物のページ <http://w3.kcua.ac.jp/jtm/publications/index.html>
- 5 資料所蔵のページ <http://neptune.kcua.ac.jp/cgi-bin/kyogei/index.cgi>
- 6 SPレコードのページ [http://neptune.kcua.ac.jp/cgi-bin/kyogei/index\\_sp.cgi](http://neptune.kcua.ac.jp/cgi-bin/kyogei/index_sp.cgi)
- 7 大学院日本音楽研究専攻のページ <http://w3.kcua.ac.jp/jtm/graduateschool/index.html>
- 8 でんおんセミナー、公開講座などのページ <http://w3.kcua.ac.jp/jtm/events/index.html>
- 9 2001 Tilmann Seebass, Allan Marrett, 2002 Elizabeth Oyler, 2003 Philip Flavin, 2006 Bonnie Wade, 2007 Rosey Lee, 2012 Natalia Klobukova など。